

連載小説と読者

——戦後女性雑誌『マドモアゼル』にみる——

近藤洋子

『マドモアゼル』は、小学館が昭和三五年に発刊した月刊誌である。創刊号の一月号発売に合わせ、前年三四年十二月七日の新聞に編集長桜田正樹の署名入り広告を載せた。

「きょう、〈マドモアゼル〉第一号を、お届けします。私たちは、この〈マドモアゼル〉に、若く未婚のあなたの、夢み・話し・想い・喜び・歌い・信じ・装い・恋する……すべての生き方を編集したつもりです。つまり、あなたのきょうの生活と知性が、新雑誌〈マドモアゼル〉の中にあるのです。」と「未婚のあなたに・編集長から」呼びかける。

「若く未婚のあなたの、すべての生き方を編集した」と語り、「きょうの生活と知性」を示し伝えると連ねている。

小論では、『マドモアゼル』に掲載された小説を、読者がどのような受けとめたのかを考え、編集方針がどう具体化されたのか、みてゆきたい。

I

「もはや戦後ではない」という表現ほど、戦後の経済復興を象徴したものを見あたらない。

これは、昭和三一年度の『経済白書』中にあるのだが、この白書の

総説は、「世界技術革新の波に乗って、日本の新しい国造りに出発する」必要性を説いて結ばれている。

第二次世界大戦敗戦後、疲弊しきっていた日本経済を、直接間接に影響を与えて大成長に導いた大きな要因は、一九五〇年（昭和三五年）六月に勃発した朝鮮戦争である。日本占領米軍が国連軍として出動し、日本が兵站基地となった。朝鮮戦争の特需は、この後の経済発展を促す基盤となり、休戦協定が結ばれた一九五三年には、日本の生産規模は画期的な量産体制に入っていたのである。

産業界の好況は、出版界にも浸透し出版事業の拡大をもたらした。出版業界発展の要因は、好況とともに、人口の急増加があげられる。ベビーブーマーの存在である。昭和二年から二四年にかけて、毎年二七〇万人弱ずつ出生しており、この期間はベビーブームとよばれるが、この集団が順次就学期を迎え、読者人口増大に結びついたのである。

児童の学年別学習雑誌発行では、「日本文化の基礎は小学教育にある。小学教育こそが重かつ大である」として、大正十一年に設立された小学館が他社より優位に立っていた。しかし第二次大戦後、講談社が昭和三十年に、既に刊行されていた『少年クラブ』『少女クラブ』より下の年齢層、小学三・四年生を対象とした『ぼくら』『なかよし』を創刊した。そして、昭和三一年九月に『たのしい一年生』を創刊し、

学年別学習雑誌に進出したのである。

ベビーブーマーが学齢期を迎え、雑誌の販売部数が大幅に伸びて、業績も安定しだした小学館に、講談社が挑む形になって、両者は学習雑誌販売にしのぎを削った。この激しい競争は、昭和三八年三月に講談社が『たのしい一年生』と『たのしい六年生』の刊行を終えるまで続いたのである。講談社の『たのしい一年生』と『たのしい六年生』の終刊に関して小学館は、『小学館五十年史年表』に「この結果、三一年以来の激しい攻防戦は終結し、この分野は再び本社の学習雑誌が書店店頭を独占することになった」と勝利宣言を載せている。

小学館は、学年別学習雑誌では講談社より先んじていたが、婦人雑誌は、講談社の方が早くから出していた。講談社が『婦人倶楽部』を創刊したのは、大正九年十月である。既に婦人雑誌は何種類か出ていて売れ行きもよかった。当時の代表的な婦人雑誌には、『婦人世界』（明治三九年創刊 実業之日本社）『婦人画報』（明治四十年創刊 婦人画報社）『婦人之友』（明治四一年創刊 婦人之友社）『婦女界』（明治四三年創刊 婦女界社）『婦人公論』（大正五年創刊 中央公論社）『主婦の友』（大正六年創刊 主婦の友社）などがあった。

昭和三十年当時には、二十種余りの月刊雑誌が出されていた。その中心をなしていたのは、いわゆる婦人四誌とよばれている『主婦の友』『婦人倶楽部』『主婦と生活』（昭和二年創刊 主婦と生活社）『婦人生活』（昭和二年創刊 同志社）で、いずれも実用雑誌だが、部数は四誌伯仲し合計で二二〇万部近くであった。

しかし、十七・八歳から二二・三歳までの未婚女性のための実用雑誌はまだ出版されていなかった。

講談社は十代後半から二十代前半の未婚の女性を対象に絞り、一番欲するものを重点的に取り扱う新しい婦人雑誌を作る、という目的から『若い女性』を昭和三十年九月に創刊したのである。

あくまでも実用雑誌である。初代編集長久保田裕は創刊事情につい

連載小説と読者

て、「婦人雑誌の付録だけ欲しい、中でも服飾面だけほしいという人がかなり多い。こうした服飾面だけに関心が強いのは、未婚の人に多い。その要求の強い年齢層にこたえて、服飾を中心としたところの実用性、ここにポイントがおかれた。読物、記事、また服飾記事その他についても、すべてそうである。それに昭和二九年から三十年にかけては、服飾一般について世間の関心がたかまっていた。いわゆる服飾ブームの登り坂で、AラインだとかBラインだとか騒がれていたもので、新雑誌の創刊には、時期的にもちょうどよかった。」と語っている。

『若い女性』は、B5判の大判とし、婦人四誌とは差別化をはかり、定価一三〇円と、『婦人倶楽部』『主婦の友』『主婦と生活』よりも五〇円安くした。当初十万部であったが、好評で十二月号までに二二万部に伸びていた。

昭和三十年以降、日本経済は神武景気、岩戸景気とよばれる好況に恵まれたが、この好況は、生産が年平均二二パーセント、輸出が年平均四六パーセントの伸び率という工業部門がもたらしたものであった。工業の進展に比べ、この高度成長期に農業は著しく衰退していった。色川大吉は、『昭和史世相篇』において、「戦後の一時期、総人口の半分に達していた農村人口は、昭和三〇（三五年には一九四万人減少し、さらに昭和三五（四〇年の五年間で四三三万人も減少した。（中略）一つは政府の農業切り捨て政策によるものだが、もう一つは都市の商業に安価な労働力を吸収されたからである。」と指摘する。農村を捨て都市へ出た若い女性たちが、新しい読者にもなったのである。

講談社に遅れること四年、小学館が未婚の女性向け雑誌『マドモアゼル』を昭和三五年一月に創刊した。

小学館としては、景気好調を背景に「広告媒体としても強化拡大」し、経営の安定をはかることが目的の創刊であった。当時、広告媒体としても雑誌は活用されていた。

『マドモアゼル』創刊号には、「日立製作所、キスミ化粧品、ピ

連載小説と読者

アス、村山東京店、オリムパス刺繍糸、新三菱重工、バビリオ、小林コーサー、エーザイなど一流広告主の特殊面定期契約をはじめ、理研工学、大東紡、東洋レーヨン、レナウン、ウテナクリームなど七六社の広告」が載り、小学館広報課は、「まことに祝福されたスタートを切った」と報じた。広告主が、未婚女性の購買力に期待したことの現れであろう。

さて、小学館は前述のように、学習雑誌を看板とした出版社である。中学生向けには、昭和二四年一月に『中学生の友』を創刊し、翌二五年四月には女子中学生向けに、『女学生の友』を創刊していた。学習雑誌の小学館としては、『女学生の友』を卒業したその上の年齢層を開拓するものでもあり、講談社の『若い女性』のように「若い女性のためのフレッシュな実用雑誌」と「実用」を売り物にはできなかった。あくまでも『女学生の友』に続く雑誌であって、講談社の『婦人倶楽部』読者の若年層という捉え方とは違っていたと考えられる。

小学館が講談社と異なり実用誌ではなく教養誌を目指した背景には、昭和三十年代から四十年代にかけてのベビーブーマーの、特に女子の教育程度が急激に高くなったことがあげられる。『婦人の歩み30年』によれば、教育程度について十五歳以上人口に占める割合を、昭和三五年と四五年とで比較すると、初等教育（義務教育程度）修了者は減少しているが、中等教育（旧制中等学校・新制高等学校卒）は、24%から32%へ、高等教育（短大、高専、大学卒業）は、2%から5%に増加している。また、同書によると、二〇歳から二四歳の女子未婚者数が、昭和五年に37・7%だったのが三五年では68・4%に、四五年では71・7%となっている。戦前に比べて結婚する年齢が高くなっているものである。中等教育を終えてから、さらに高等教育を受ける、あるいは就職するなど、結婚までの期間が長くなった。未婚でしかも戦前より高い教育を受けた女性がターゲットになったのである。したがって、『マドモアゼル』創刊時の広告でうたった「知性」ははずせ

ないものだったのである。

初代編集長には桜田正樹が就いた。桜田は、昭和二六年に入社し、三十年から『女学生の友』（昭和二五年創刊）の編集長をしていた。『女学生の友』が創刊時七万八千部であったのを、昭和三四年には、十八万五千部に伸ばしていた。実績を買われての『マドモアゼル』編集長就任であった。

『女学生の友』が桜田が編集長になって部数が飛躍的に伸びたのは、ジュニア小説というジャンルを創ったからである。「当時、少女小説はエスを描いていたが、佐伯千秋を起用して、男女交際を描いた小説を登場させた。社内でも非難はあったが、挿し絵に起用した藤田ミラノもあたり、売り切れ続出となったのである。『マドモアゼル』創刊当初は『女学生の友』の編集長も兼ねていた。

『マドモアゼル』は、小学館としては、横文字だけの誌名第一号で、後年桜田は「マドモアゼル」というフランス語のひびきからいいネームじゃないかと考えていたところ、当時『女学生の友』の編集をやっていた作家の永井路子（黒板抜子）さんも同じネームを考えていたんです。それに力を得て役員会にかけましたが、比較的スンナリ決まりましたね。」と語っている。

雑誌を創刊する小学館の会社としての戦略、「広告収入拡充」のためには、「生活（実用）」の面も重要だったが、桜田は一方で、見る雑誌ではなく、読む雑誌を目指し、『婦人公論』を意識していた。発売日も、『婦人公論』などの婦人教養誌と呼ばれる雑誌と同じ、毎月七日にした。

『婦人公論』は、昭和三二年九月に、中央公論社社長嶋中鵬二が編集長になった。本格的な教養読み物を読者に提供するという方針のもとに、丸山真男や武田泰淳に意見を求め、「近代日本人物評価」など新鮮な連載を企画した。

創刊五〇〇号（昭和三三年十一月号）を期に、初めての女性編集長

として三枝佐枝子が任に就いた。三枝は、前編集長の基本方針を受け継ぎながら、三つの賞を設けて、新人の発掘や文芸欄の充実にも力を注いだ。五〇〇号を記念して「女流新人賞」（「婦人公論女流新人小説」を改名）、また、昭和三七年には、「女流文学賞」（女流文学者会の「女流文学者会賞」を解消して、婦人公論主催として新設）と、「読者賞」を新設して、読者と執筆者、編集部を近づけるなど、他の婦人雑誌とは一線を画していた。出版年鑑などでも『婦人公論』は教養誌・評論誌と分類されているが、このジャンルでは圧倒的に部数が多く、昭和三十年には二六万部を発行している。

桜田正樹は、『女学生の手』の読者を『マドモアゼル』につなげるために、できるだけ著名作家を投入した。読む雑誌として判型も『婦人公論』『女学生の友』と同じA5判にした。判型については、『婦人公論』の三枝編集長が『編集長から読者へ』において、『婦人公論』のような教養誌が、小判であることのさまざまなハンディがあるのにもかかわらず、大判化しないのは、読むためにはあの判が一番読みやすいからなのです」と述べている。

読む雑誌にこだわった桜田は、『マドモアゼル』第四号の昭和三五年四月号の「愛読者の窓」と銘打った読者投稿欄において、読者との合評会を掲載し、読者の「グラビアは大判がよい」という声に対して、「検討はしているが読む本として豊富な内容を盛るのは、A判の方がよい」とこたえている。

II

さて次に『マドモアゼル』に掲載された小説についてみてゆきたい。昭和四三年三月に終刊を迎えるまで八年間に、二二本の小説が連載された。その連載小説を読者がどう受けとめたのであろうか。

以下に連載小説の一覧をあげる。○内は掲載年月で、年号は省い

連載小説と読者

たが、昭和である。

- 「二十歳の設計」源氏鶏太（35・1～36・3）
- 「途上」曾野綾子（35・1～35・12）
- 「永遠のためいき」新田次郎（35・1～35・12）
- 「殺人者」原田康子（36・1～37・4）
- 「禁断」石原慎太郎（36・4～37・5）
- 「紅い白描」松本清張（36・7～37・12）
- 「連舞」有吉佐和子（37・1～38・5）
- 「湖影」三浦哲郎（37・5～38・3）
- 「肉体の学校」三島由紀夫（38・1～38・12）
- 「ずべ公天使」吉行淳之介（38・1～38・12）
- 「嫁さん」壺井栄（38・4～39・3）
- 「翳りある微笑」黒岩重吾（38・10～39・5）
- 「青年時代」源氏鶏太（39・1～40・3）
- 「人形姉妹」円地文子（39・4～40・6）
- 「青い血の娘」柴田錬三郎（39・4～40・3）
- 「雲よ汝は」丹羽文雄（40・4～40・12）
- 「青春海流」富島健夫（40・4～41・3）
- 「協奏曲」遠藤周作（40・8～41・7）
- 「花燃える」佐伯千秋（41・4～42・3）
- 「乱舞」有吉佐和子（41・5～42・1）
- 「夜会服」三島由紀夫（41・9～42・8）
- 「愛の重荷」源氏鶏太（42・4～43・3）

の二二編である。これらの連載小説に対して読者はどのような感想を持ったのだろうか。

『マドモアゼル』には、巻末に「愛読者の窓」と題した三～四頁の読者投稿欄が設けられている。ここには、雑誌全体に関しての読者評や意見が中心に載り、小説評はあまり載ってはいない。小説評は、終

連載小説と読者

刊までの八年間に掲載されたのが八件である。初期連載小説については、その内の半数、四件にのぼっている。いずれも好評ばかりで、その四件ともに「途上」に好意的なものである。「二十歳の設計」にも一件、「途上」と合わせて評判のよいことを投じている。しかし、この欄の批評は、どこがよいのか具体的に触れているものはない。「連載小説もみんなすばらしいものばかり、とくに曾野綾子先生の『途上』がステキです。(愛媛県八幡浜市須崎町一ノ十三鈴屋久子) S 35・10月号」という具合である。

ただ、創刊時の連載小説「二十歳の設計」「途上」「永遠のためいき」には、掲載頁に「読者の手帳」と題して囲みで毎回二本ずつの投書を、それぞれに載せている。「愛読者の窓」評に対して、小説掲載頁の「読者の手帳」欄の投書は、登場人物の名を挙げて感想を述べたものが多い。

小説の読後感想は、連載小説の場合、当然掲載されるのは、次号である。第一回の感想は、第二回に載る。そしてそれは、連載小説に不可欠の毎回設けられる「前号までのあらすじ」に、感情を付加するような趣きになるのである。以下、具体的にみながら分析をすすめたい。

「途上」(曾野綾子)は、一月号から十二月号まで十二回の連載で一回十二頁、さし絵は、宮永岳彦である。主人公は女子大一年生の新庄流子。小説はほぼ一年間のできごとを書いており、第一回は「プラタナスの葉が落ちた」晩秋からのスタートである。最終回は氷雨の降る季節である。筋を追いつながら考えたい。回毎に梗概に触れ、その読者評をみる。(①は第一回、◇内は各回のタイトルで、以下同様である。読者評は該当する号数を表示した。)

①〈木もれ陽〉新庄流子は、病弱で新興宗教の創価学会に凝る母と小児麻痺の兄真之助、勝ち気な姉須磨子と、父の死後伯母の林家に四人で厄介になっている芳土女子大学の一年生。林家は船会社を経営する資産家で、同級生で従姉の千世がいる。千世は流子のよき相談相手で

あった。ある日、流子は「林さん」と呼びかけてきた青年から交際を求める手紙をもらった。神田大学三年の久間木雄三だった。

この第一回に対する反響の中から掲載された二つの読者評は、次のような文章である。

・第二号「父親をなくしたうえに、小児麻痺の兄をかかえた、この一家を人ごととは思えません。デカダンな姉、素直な妹、二人の女性の生き方には、それぞれの言い分があるでしょうが、血肉を分けた兄妹に不具者がいても、それで暗い気持ちになることなく、母をかばって生きている流子の美しい心根に泣かされました。(熊本 田川優子)」

「曾野先生の作品の中でも、傑作の一つだと思います。久間木雄三は本当に素朴で、いい青年のようですね。いまは不幸でも恵まれない家庭環境をのり越えて、いつの日か、きっとすばらしい幸せがこの一家に訪れるのではないのでしょうか。(新潟 沢野玲子)」

読者は、不具の兄と婚期を逸した姉そして片親、という傍目には恵まれない家庭環境の主人公の状況に、哀れみと同情を寄せている。そしてこの不幸な境遇の主人公は必ず幸福になるはずと期待をする。小説の前半では登場人物の紹介が行われるのだが、第二回では次のように姉須磨子が描かれる。

②〈妹娘〉須磨子は、停電した地下鉄の中で助けてもらって以来土木技師の三崎を慕っていた。三崎には妻があった。須磨子はそれでもよいとのめり込んでいった。久間木が流子を林家の令嬢ではないと知っても構わないと、家を訪ねてきた。流子は自宅に招くつもりだったが、交際を勧める伯母は林家の応接間に案内し、聞かれもしないのに一族のことを話し続けた。流子には伯母の自己宣伝が後味悪く残った。

第二回の読者評は、

・第三号「須磨子が三崎に恋した気持ちは、けっして、いいかげんなものじゃないと思います。初めて知った美しい慕情を、たとえ、妻子ある人でも、家族や伯母たちがもっと親身になってやれば、いつか、

かたくなな心もなごむでしょう。(石川 大井恵子)」「とうとう、久間木が流子のもとへ訪れましたね。そして伯母さんが実に、うるさいほど世話をやいているのにおどろきました。でもちょっとうるさい感じ……。この二人はきっと、幸せな恋人同士になるでしょう。(埼玉 仲田幸子)」

読者はあくまでも主人公の、そしてその家族の味方である。須磨子の妻子ある男との恋愛にも肯定的で、許している。それに比べて一族でありながら、金持ちの伯母には反感を抱く。前回同様に主人公に心を寄せて、一喜一憂する投書が掲載されている。

第三回には、林家とは別の親戚の従兄祖父江敏行が登場して、流子を励ます。久間木は熱心に求愛するが、流子は困惑するばかりであった。第四回に須磨子が三崎の元へ家出をするのだが、第四回の読後感想には、久間木に対する疑問や須磨子に注意を引かれたものが掲載されている。

・第五号「三号、四号と読むうちに、久間木という男がドンファンに思えて仕方ありません。流子はほんとうに彼を愛しているのです。うか？ 清純な流子が心配で心配で……。 (新潟 金井咲子)」 「須磨子が出ましたね。でも私は好きな人なら理屈めきで体ごとぶつかって行く彼女の方が、愛情のはっきりしない交際をつづける流子よりも女らしい生き方だと思います。(大阪 田島絢子)」

読者は、流子の優等生的な恋愛よりも、利根的な恋愛を求める須磨子の生き方にドラマを感じている。須磨子の相手三崎の事情については、第五回で明らかにされる。三崎は特攻隊員だった。出撃前に結核療養中の雪子と知り合い、生きていたら結婚しようと誓い、思いがけない終戦で結婚した。子供が産まれたが、六ヶ月でその子は死んだ。それ以来、雪子とは気持ちが通わなくなり、隧道の建設現場に単身赴任していたのだった。

第六回で、久間木が運転する車が事故を起こして千世がけがを負っ

連載小説と読者

たことをきっかけに、久間木が千世に近づき千世が妊娠した。流子が千世から妊娠を知らされた翌日、今度は須磨子が三崎と心中を図り、死んだ。作者は道徳に反する須磨子の恋愛に断罪を下した。

・第十号「姉の須磨子は自殺してしまいましたね。人間だれしも一度は考えることでしょうが、死ぬ事だけは思いとどまりたいものです。流子は姉と違って辛い生活もかならず乗り切るでしょう。早く明るい生活の来る事を祈りつつ。(長野 伊東節子)」 「苦悩の中に生まれ、生活し、死んで行く——こういう人間のなんと多いことか。そして流子もまた……。でも流子を悩ましている不運の数々はきっと彼女をきたえ、大きな不幸に耐える力を育てて行くにちがいない。(群馬 中島美苗)」

この妻子ある男性を愛した須磨子は許されなかったという展開に、掲載された読者評は作者を批判しない。行儀のよい道徳的な文章である。

久間木を愛しているとは言い切れなかったが、千世の妊娠と姉の自殺とは流子に大きな衝撃を与えた。その流子を救うのが、千世の兄信也と、林商船の二等航海士津村達夫であった。津村は精神病の姉をもち、流子の小児麻痺の兄真之助のこともあり、遺伝をおそれ流子との結婚に踏み切れない。

・第十一号「宿命の中に生きる流子、その途上をおおう不幸にもめげず、なおも歩んで行く若い女性に力強さを感じさせられます。どこか陰のある生活に興味深さを覚え、いつかくる幸せの日を待遠しく思っています。(奈良 皆己サカエ)」

最終回の第十二回で、そんな流子と津村に、人間を超えたもっと大きな力にすがって祈れ、と信也が励ます。津村が流子に求婚しようとするところで小説は完結する。

・第十二号「苦悩に包まれながらもひとすじの人生の途を歩き続けるデリケートな流子。きっと明るい人生が開けて来ると信じます。信也

は流子を幸福にできないものでしょうか。(兵庫 西脇年子)」「不幸と戦いながら、自分をいつもよく見つけて生きて行く流子……すべての人にやさしく、すなおさを失わない流子には、幸せの訪れる日もきっと近いにちがいないと信じています。(徳島 遠藤通子)」

最終回で津村がクローズアップされるために、読者の津村評は全く出てこない。読者は連載小説の場合には単行本と違って、どうしても最終回にならなければ結末を知ることができないのである。結末に向けてハッピーエンドを期待する投書が掲載される所以でもある。

作者の曾野綾子は、昭和六年に東京で生まれたが、六歳の聖心女子学院幼稚園入園以来、昭和二九年に聖心女子大学を卒業するまで、疎開時を除いて一貫してカトリックの教育を受けた。十七歳の時に受洗し、洗礼名マリア・エリザベートを持つ。作中で伯母の口を借りて、当時勢いを持ちつつあった創価学会批判をしたり、遺伝をおそれるよりも天地を司るあらゆる超人的な力にすがれと、流子や津村の背中を押す場面などは、作者の宗教観を彷彿とさせるものである。また「途上」には、昭和三四年八月に、『主婦の友』のルポルタージュで、北陸トンネル工事現場に入った経験が、三崎の仕事に対する思いに生かされている。

次に「途上」と同時に掲載された「二十歳の設計」に対する読者の反響をみてゆきたい。さし絵は森本元子、十五回の連載で主人公は栗林杏子、十九歳である。誌面の都合で掲載されなかった十三号以外の各号に読者評が載っている。「途上」と同じように各回毎の梗概に沿って読者評をみたい。

①栗林杏子は十九歳。両親を相次いで中学のときに亡くし、兄太郎と暮らしている。父を亡くしたとき高校三年だった兄は大学進学を断念して就職し、杏子の高校進学を支えてくれた。杏子と太郎は互いを思い合う仲のよい兄妹だった。しかし杏子が卒業して就職をさがすと、

成績優秀にもかかわらず、両親がないことを理由に入れる会社が全くなかった。そんなときに、太郎の同僚で東亜物産重役の息子、津坂敏浩が、杏子を系列会社東亜不動産への就職をはからってくれたのだった。

第一回を読んだ読者は、早くも主人公杏子に接近する津坂に疑問を持っている。

・第二号 「大好きな源氏先生の作なので、期待して読みました。先生のユーモア小説は幾つも読みましたが、こんなにしみじみした、ペーソスのある物語は初めてです。花ひらく前の乙女の愁いと歓びが、何よりも身近に感じられます。(青森 石渡洋子)」

「両親亡きための、冷たい就職戦線」でも彼女は、きつと幸福になれる素質を持っている女性だと思います。ただ、この津沢という男性は、本当にやさしい立派な青年なのでしょうか。何だか心配になる親切さーだと思いませんか？(東京 岸順子)」

②杏子は兄と同じ丸の内通勤することになった。一ヶ月後津坂に食事を誘われ、太郎の了解を得て交際してほしいと告げられた。太郎は身分違いを理由に、すっかり賛成はしなかった。津坂は結婚するつもりで両親にも杏子を紹介した。クリスマスの夜、接吻した後、新婚旅行の話などしながら歩いていて、津坂は杏子を旅館へ同伴しようとした。躊躇し抗った。そのとき突然背後で、ヒステリックな笑いが響いた。二人がギョッとして振り返ると、女が現れ、津坂を嘲笑した。狼狽した津坂は「黙れ」とどなった。杏子が今まで聞いたことのないほど下卑た声だった。同じ頃太郎は、友人の深見とおでん屋で飲んでた。深見は太郎に杏子を嫁にほしいと頼んでいた。

第二回で津坂の化けの皮がはがれるのだが、三号、四号に掲載された読者の声は次のように、杏子に同情し津坂に腹を立てた文章である。

・第三号 「紳士だと思っていた津沢の、あの強引な態度と、怪しげな女の出現には、杏子ばかりか私も驚かされました。彼は、やさしい

兄、太郎のような青年だと信じていたのに、裏切られたようで、杏子の前途が今から不安でなりません。(和歌山 中村敏子)」

・第四号 「この物語の魅力は、何といっても、先生独得のペースと、その中にひそむ甘さです。津坂の正体を知っても、なお彼を信じ、愛そうとする杏子の姿に、真実、人を愛することのきびしさ、哀しさを教えられました。(徳島 大越元杖)」 「地位や美徳を売り物にして、部下の女性を次つぎと誘惑するとは！津坂は何という男でしょう。ドンファンと津坂と純真な杏子とは、恋の女神も、ずいぶん罪な組み合わせを作ってしまったものですね。(神奈川 山上勝子)」

「二十歳の設計」では、両親のない兄妹がそれぞれに、裕福な家庭に育った相手(兄太郎は大株主の娘大道久仁子に、妹杏子は重役の息子津坂に)に恋をして悩むのだが、その恋愛に対する考え方に疑問を投げかけた投書が第六号に載っている。

・第六号 「杏子も太郎も、身分違いという言葉をよく口にしますね。でも恋愛に身分ということなど第二次的なものであるはず。もっと、強気で相手にぶつかってほしい。杏子の失恋は仕方ないとしても、太郎さん、久仁子さんの愛をぜひ獲得してください。(山形 古屋幸子)」 小説を批判的に読みながら、登場人物に対して友人のように応援を送っている。この登場人物を応援する投書が「二十歳の設計」にはかなりみられる。

・第七号 「マドモアゼルの一巻の魅力は、この『二十歳の設計』です。ヒロインの杏子と同じ年で、同じような境遇にある私は、杏子と一体化してしまった気持。茨の道を歩むこの兄妹に、早く暖かい太陽が輝くように、栗村兄妹よ、がんばれ！(広島 友重武子)」

・第八号 「小野せつ子さんでとてもやさしい方！同名のよしみか、杏子さんによりも彼女の過去に対して同情心が起きます。太郎さん、久仁子さんばかり思いつめないで、杏子のよきアドバイザーであるせつ子さんの好意をうけとめてあげて下さい。(神戸市 青木節子)」

連載小説と読者

・第十四号 「源氏先生の『二十歳の設計』は、私たち二十代の心理を巧みにつかんでいます。太郎さん、どうか勇気を出して真実の愛をみのらせてください。また深見さん、せつ子さんにも、早く幸福がもとずれますように。(香川 山西夏代)」 「津坂が悪い奴でも、杏子には失恋の痛みが残ります。でも、兄の太郎がついてきます。そして、せつ子、深見など七人会のよき人びとが愛すべき人たち、みんなしあわせになってください。(大阪 中川富子)」

など、あたかも自身が小説の登場人物であるかのように、呼びかけ声援を送る。

III

二つの作品の投書をみてゆくと、その受け止め方の違いに気がつく。「二十歳の設計」の方が、親しみを持って読まれているのである。登場人物を友人のようにみている。つまり、「二十歳の設計」も「途上」と同様に、家庭的には恵まれない兄妹の話なのだが、主人公杏子が「途上」の流子のように階層的には孤立していないために、読者がさらに身近に、かつ自由に読むことができていたのではないだろうか。杏子の味方はいずれも庶民である。また、「途上」の流子の周囲にある小児麻痺や精神病は、軽く流すことのできない事柄である。読者も同情は寄せるが、踏み込み難い重い問題である。「途上」の第五回で、津村の祖母が津村の精神病の姉を追連れに心中を図るが、遺書に、「パパは、気力があるうちに先に死にます。パパは、人をうらんで死ぬるのではない。お国でこういう病人のめんどろをやって下さらないじょうは自分でいたすほかはないでしょう。パパはすることをして死ぬるだけです。」と書き残してあった。作者は精神病の看護を社会的な問題として投げかけるのだが、投書を見る限りでは読者はそれに応えていない。また、流子が久間木に裏切られた形で、千世が妊娠して

結婚することになった場面、久間木の祖母が登場する。久間木の祖母は、流子に「あなたの耐えておいでになった立場の苦しさがよくわかる。いちどゆっくりお話ししたい。雄三という人間についても、祖母という立場からではなく、全く外側からあなたと話し合ってみたい」と手紙を書き送っている。流子はその手紙に救われるのだが、読者がその手紙をどのように受け取ったかは、投書からは読みとれない。登場する二人の祖母は、それぞれに思慮深い人物として描かれているが、祖母たちに言及する投書は掲載されていない。投書があったとしても、「読者の手帳」欄には選択されなかった。

「読者の手帳」では、投稿本文以外には投書者の名前と出身地しか載っていない。年令も職業も不明である。また、女性名であっても、男性が偽名を使ったことも考えられる。したがって投書を読者の素直な感想として、顔面通りには受け取りにくい。あるいは投書に編集部の手が加わることはなかったのか。この編集部の関与については、女性として小学館初の副編集長をされた永井路子氏に、「スペースに合わせて長いものは短くし、文章のおかしなものは担当者が適当に手を加えた。しかし、投稿者の意図は損なわないように注意した」とのご教示を得た。

投書を読者の感想として鵜呑みにはできないが、編集方針として捉えたらどうであろうか。その読者投書の内容を含めての誌面づくりである。まず考えられるのは、地域や年令を超えた読者同士の連帯感づくりである。そして、小説に関しての編集部が期待する読者像の提示。たとえば、「二十歳の設計」について、「恋愛における身分違い」に異議を唱える評が載った昭和三十五年六月号には、「部落」の特集が組まれ、「理由なき差別と偏見に苦悩する社会」として問題を提起している。また、「途上」の須磨子無理心中事件では、それを認めるような評は道義的にも載せず、「死ぬことだけは思いとどまりたい」という評が選ばれている。その十月号には、「名もなく貧しく美しく生きる」

と題して、四本の手記が特集されている。「読者の手帳」は掲載号全体の編集と合致しているのである。永井氏に、作家に作品を依頼するときに「暴露的ゴシップ中心の雑誌ではなく、読む雑誌、考えさせるところがある雑誌を目指していること。純文学ではないが、若い女性を対象としたものであること」などを話したとご教示いただいた。掲載される読者の投書の選出は、作家に対するのと同じ姿勢がとられたのであろう。さらに、小説を盛り上げるための応援団として、言ってみれば、歌舞伎などでひいき役者に呼びかける掛け声の役目を、「読者の手帳」は担っていたのである。

【注】

- 注1 「朝日新聞」昭和三十四年十二月七日掲載によった。
- 注2 特需については、『日本近代史辞典』（日本近代史辞典編集委員会編 東洋経済新報社 一九八九年五月十日刊五刷）を参照した。
- 注3 『小学館五十年史年表』（小学館社史調査委員会編集・発行 昭和五〇年十二月十五月初版第二刷）
- 注4 『出版年鑑 一九五六年版』（出版ニュース社編、発行 昭和三十一年四月二〇日）
- 注5 『講談社の歩んだ五十年 昭和篇』（社史編集委員会編、講談社 昭和三十四年十月二十日刊）
- 注6 注4に同じ
- 注7 『昭和史世相篇』（小学館一九九一年二月十月初版四刷）
- 注8 注3に同じ
- 注9 「雑誌広告 No.69」（日本雑誌広告会 昭和三十五年五月）
- 注10 『講談社七十年史 戦後編』（講談社発行 昭和六〇年六月）
- 注11 『婦人の歩み30年』（労働省婦人少年局編 昭和五十年十月）
- 注12 小学館総務局参与社史編集室、佐山辰夫氏にご教示を受けた。

注13 『雑誌で読む戦後史』（木本至著 新潮選書 昭和六十年九月二五日刊）

注14 「小学館だより」（社内報 昭和四十二年十一月）

注15 『婦人公論の五十年』（中央公論社 昭和四十年十月十八日）

注16 注13に同じ

注17 『編集長から読者へー婦人雑誌の世界ー』（今井田勲・三枝佐枝子著 現代ジャーナリズム出版会 昭和四十二年十二月十日）

付記 永井路子氏と、小学館佐山辰夫氏に懇切なご教示をいただきました。記して感謝いたします。

（本学専任講師）